

## 1 捨てられた男人魚

こっちに来るんだ おまえたち さあ行こう  
丘を降りて 海の底に戻るんだ  
兄弟たちが入江から呼んでいる  
強い風が岸に向かって吹いてくる  
潮が海に向かって退いてゆく 5  
泡吹く白馬が暴れている  
轡をかみ じりじりと 脚蹴りあげて飛沫を飛ばす  
おまえたち さあ行こう  
こっちだ こっちだ

立ち去る前に呼んでみな 10  
一度だけ 母さんの名を呼んでみな  
おまえたちの声に気付くはず  
「マーガレット マーガレット」  
子供のを忘れるはずがない  
母さんの耳に届けと呼んでみな (これっきりだよ) 15  
子供のが聞こえたら 胸かき乱して  
きっと 飛んで来るだろう  
一度だけ呼んでみな そしたら行くんだ  
こっちだ こっちだ  
「母さん 僕たちもう行かなくちゃ」と呼んでみな 20  
暴れる白馬がいらいらと泡を吹いてる  
ああ マーガレット マーガレット

こっちに来るんだ おまえたち 降りて来るんだ  
もう 呼ぶのは止めな  
白壁の町と 吹き曝しの岸に建つ小さな灰色の教会に 25  
最後のお別れをして  
降りて来るんだ  
一日中呼んでも 母さんは来やしない  
さあ 離れるんだ 離れるんだ  
おまえたち あれは昨日のことだったかな 30  
きれいな鐘の音が入江を渡って  
わしらが横になっていた洞窟に届いたのは  
大波に乗って

遙か彼方の澄んだ鐘の音が届いたのは  
砂地の洞窟は奥まで涼しくて 35  
風も凧いでいた  
かすかな光が揺らめき  
海草が流れに揺れて  
まわりにたむろする海の生き物たちが  
軟泥で餌を食んでいる 40  
ウミヘビはとぐろを巻いて  
うろこを干したり 海水に浸かったり  
巨大なクジラがそばを通過してゆく  
かれらは 目を閉じること無く  
世界をぐるぐる航海し続けるのだ 45  
音楽がこちらまで届いたのは  
おまえたち あれは昨日のことだったかな

おまえたち あれは昨日のことだったかな  
母さんが出ていったのは (もう一度呼んでみるがいい)  
あの時までには 母さんはおまえたちやわしと一緒に 50  
海の底の黄金の玉座にすわって  
母さんの膝には 末の子がすわっていたな  
母さんはその子の金髪に櫛を入れながら 優しくあやしていた  
その時だった 遠くから鐘の音が水中深く聞こえてきたのは  
母さんはため息をつき 澄んだ青い海を見上げ 55  
こう言ったんだ 「行かなくては  
今日は 親戚一同が岸辺の小さな灰色の教会でお祈りするの  
地上では復活節のお祈りの時 ああ  
人魚のあなたとここには 人間の魂を失ってしまう」  
わしは言ったさ 「愛しの妻よ 海を上がるがいい 60  
お祈りが済んだら また この優しい海の洞に戻っておいで」  
母さんにはっこりして 湾の波をくぐって上がっていったよな  
おまえたち あれは昨日のことだったかな

おまえたち みんなでずっと母さんの帰りを待ったよな  
「海が荒れてきた 幼子たちがぐずり始めた 65  
人間界のお祈りというのは長いんだな そろそろ迎えに行こう」  
わしはそう言って みんなで湾の波をくぐって上がっていったよな  
渚をあがり ストックの咲く砂浜をよじ登って  
白壁の町に向かったよな  
しーんとした狭い石畳の路地を抜けて 70  
吹き曝しの丘の上の小さな灰色の教会にやって来た  
中から人々のお祈りの声が聞こえてきて

わしらは冷たい風の中を 外でじっと立っていた  
雨風に曝<sup>さら</sup>されて崩れた墓石の上に上がって  
小さな鉛枠の窓から 中の通路を目で追った 75

その人は柱のそばにすわっていた はっきりと見えたのだ  
「マーガレット しっ こっちだ 迎えにきたよ  
愛<sup>いと</sup>しの妻よ ずっと帰りを待っていた  
海が荒れてきた 幼<sup>おきなご</sup>子たちがぐずり始めた」  
でも ああ その人は一瞥<sup>いちべつ</sup>だにしなかった 80  
目は聖書に釘付けだった  
「牧師の祈りの声は大きく 扉は固く閉められたまま」  
行こう おまえたち もう呼ぶのは止しな  
行こう 降りるのだ もう呼ぶのは止しな

今 人魚たちは 85  
深い深い海の底に戻っている  
賑わう町中で その人は糸車の前にすわって  
楽し気にうたっている

口ずさむ歌 それは「ああ この世の幸せ  
賑わう町と おもちゃで遊ぶ<sup>わこ</sup>吾子 90  
牧師様と教会の鐘の音と聖なる井戸  
いつもの糸車

そして 祝福に満ちた<sup>ひ</sup>陽の光」  
こうしてその人は心ゆくまで  
幸せそうにうたい続ける 95

突然<sup>シヤトル</sup> 糸巻きが手から落ち  
糸車の音が止まる  
窓辺に静かに歩み寄り 砂浜を見る  
砂浜のむこう 海のかなたを  
目を凝らして じっと見つめて 100  
ため息を漏らす

悲しみに曇った眼から  
ひと<sup>しずく</sup>滴の涙が落ちる  
悲しみの詰まった胸から  
長い長いため息が漏れる 105  
幼い娘人魚の冷たくよそよそしい目つきと  
その金髪の輝きを思い浮かべて

さあ 離れるのだ おまえたち  
さあ 降りておいで おまえたち  
ざわついた風が どんどん冷たくなってくる 110  
街<sup>あか</sup>の灯りが<sup>とも</sup>点り始めた

風で戸がガタガタ鳴れば  
 母さんも目を覚まして  
 風のうなり声と  
 荒れ狂う波の音を聞くだろう 115  
 海底に戻って様子をみよう  
 頭上の波は荒れて うなっているも  
 ここから見えるのは  
 琥珀の天井と真珠の床<sup>ゆか</sup>  
 みんなでうたおう 「人間の女がやってきた」 120  
 でも その人は裏切った  
 だから その人はもう永久に<sup>とこしえ</sup>  
 わしら海の王者たちの側にはいないんだ」

でも おまえたち 真夜中に  
 そよ風が吹き 125  
 月の明かりがきれいな晩に  
 高潮が引いて  
 エニシダの花いっぱい荒野の方から  
 海にむかって甘い風が吹いてくる頃  
 青白い砂浜に 130  
 高い岩場がやさしく影を落とす頃  
 静かな月明かりの浜辺を  
 みんなで入江を上がってゆこう  
 月明かりに照らされた海草が張り付いた岸辺は  
 引き潮で乾いている 135  
 砂浜からみんなでじっと見つめていよう  
 月明かりのもと 眠っている町を  
 丘の上の教会を  
 それから 海に戻ってくるのだ  
 うたいながら 「愛する人があそこにいるよ」 140  
 でも その人は冷たい女で<sup>ひと</sup>  
 海の王者たちを捨てたのだ  
 永久に見捨てて 去っていったのだ」<sup>とこしえ</sup>

(山中光義訳)